音楽の散歩道 その3

― 郷土の声楽家・片野坂（大島）栄子物語　歌一筋の人生，ヨーロッパでの22年 ―

キラメキテラス ヘルスケアホスピタル　粟 博志・高田 昌実・田島 紘己・上村 章
加治木温泉病院　夏越 祥次　東区・荒田支部　粟 隆志
大海・大海宮崎クリニック　大西 浩之・海江田 寛・牧野 智礼

はじめに

これは，1962年にウィーンに留学し，22年の長きに亘り，ヨーロッパの第一線で活躍した鹿児島出身の声楽家（オペラ歌手）・片野坂（大島）栄子の物語である。60-40年位前の話である。

日本人は，ピアノやヴァイオリン等では，海外のコンクールで，比較的上位に入り易いかもしれない。楽器が音を出すからである。

それに比し声楽は，人体そのものが楽器であり，当時，小柄な日本人の場合，言語も含め不利だったと言えるかもしれない。

然し，そんな事を理由にすれば，多国籍であるクラシック音楽界で，世界に互して生き抜く事はできない。声楽は，本場ヨーロッパで揉まれてこそ，真の実力が養われる。

栄子が，初めてウィーンで注目を集め，日本でも驚きと賞賛を以て迎えられたのは，64年，オペラ歌手の登竜門，４年に一度の「**ウィーン（国際）オペラ歌手コンクール**」の事である。（図１）

男女合わせて300人余の出場者のうち，２次予選を通過した世界からの14名が，満員のウィーン・コンチェルトハウスで本選に臨み，栄子は第３位の栄冠に輝いたのである。

ウィーン国立音楽アカデミー（現・ウィーン国立音楽大学）２年の時であった（図１）。

この時カラヤン（ウィーン国立歌劇場指揮者）は栄子を絶賛，歴史的歌手ヒルデ・ギューデンやゼーフリードらも激励した。

日本の音楽雑誌，新聞はこの朗報を大きく報じた。南日本新聞でも詳細な報道がなされ，鹿児島で受賞記念演奏会が開かれた。

図１　オペラ歌手の登竜門「ウィーン・オペラ歌手コンクール」第3位の栄誉'64　カラヤンに絶賛される栄子の歌唱

更に驚く事に栄子は,「ウィーン」よりずっと大規模な，世界屈指のスペイン・バルセロナでの，65 年の第 3 回「**フランシスコ・ヴィナス国際声楽コンクール**」で，世界有数の歴史と規模（1847 年創立）を誇る大歌劇場「グラン・テアトロ・デル・リセウ」の超満員の観衆の本選で，女声部門第 1 位・優勝を果たしたのである（図 2）。これにより栄子の名前は，一挙に国際的となった。

40.000 PESETAS PARA EL BARITO
BARCELONES VICENTE SARDINE

Ha sido el triunfador del III Concurso Internacional de Canto «Francisco Viña
a Eiko Katanosaica, soprano japonesa

Diez cantantes, hombres y mujeres, llegaron el día 11, a las siete y media de la tarde, en el Palacio de la Música, a la final del III Concurso Internacional de Canto «Francisco Viñas». En este tercer año, los finalistas tuvieron el respaldo de la Orquesta del Conservatorio Superior de Música del Liceo, dirigida por el maestro José M.ª Roma.

El Palacio de la Música, como en toda la velada importante, se abarrotó. Y, por contraposición a lo que suele ocurrir, el público permaneció en sus localidades una vez terminada la audición en espera del fallo del Jurado, que fue rápido en deliberaciones. Según este Jurado Internacional, tan sólo dos cantantes no merecían premio. La uruguaya Alba Tonelli y el canadiense Bruno Laplante.

Los otros ocho cantantes consiguieron estos galardones:

CANTANTES MASCULINOS:

Primer premio, dotado con 40.000

Los ganadores del III Concurso de Canto «Francisco
japonesa en los primeros puestos y un japonés y u

III CONCURSO INTERNACIONAL DE CANTO
«FRANCISCO VIÑAS»
DIPLOMA DE HONOR

図2　スペイン･バロセロナ「フランシスコ･ヴィナス国際声楽コンクール」第1位優勝の栄冠'65
スペインの大航海時代以来の栄光を物語るリセウ大歌劇場にて

（付録）バルセロナ

バルセロナは芸術都市である。建築のガウディ，音楽のカザルス，美術のピカソなど。オペラでは，カレーラス，デ・ロス・アンヘルス，モンセラット・カバリエの生誕地。なおドミンゴは，スペインのマドリッド。

優勝の副賞として，賞金の他，前記のリセウ歌劇場でのオペラ公演と，スペイン国内での 10 近いリサイタルの権利が与えられた。

副賞のオペラ公演は，出場資格が 35 歳以下のみであり，プロを含む多くの出場者が，オペラのレパートリーを持っていたからである。然し，音大生の栄子には，オペラのレパートリーがなく，残念な事に公演は辞退せざるを得なかった。なお多くのリサイタルの成功は，栄子にとって，多大の自信となった。

これを機に，本格的にプロ・ソプラノ歌手としてヨーロッパでの公演活動が始まる。

通常，日本人は留学数年で帰国するが，60 ～ 70 年代当時，栄子のように 22 年間もヨーロッパの第一線で歌い続けた歌手は，極めて稀であった（いなかったかもしれない）。

〔1〕日本での演奏活動

ここでは，日本での初期の演奏活動の一部を紹介する。なおマタチッチは，バイエルン，ウィーン，フランクフルト歌劇場などの指揮者を歴任，N 響の名誉指揮者。

（1）NHK 交響楽団（定演，臨時公演）

67：**ヘンデル**「メサイア」マタチッチ

68：**ブルックナー**「テ・デウス」マタチッチ

69：**ハイドン**「ミサ曲」マタチッチ

70：**モーツァルト**「大冠ミサ曲」ルッチ

（2）東京交響楽団（定演と 69 特別演奏会）

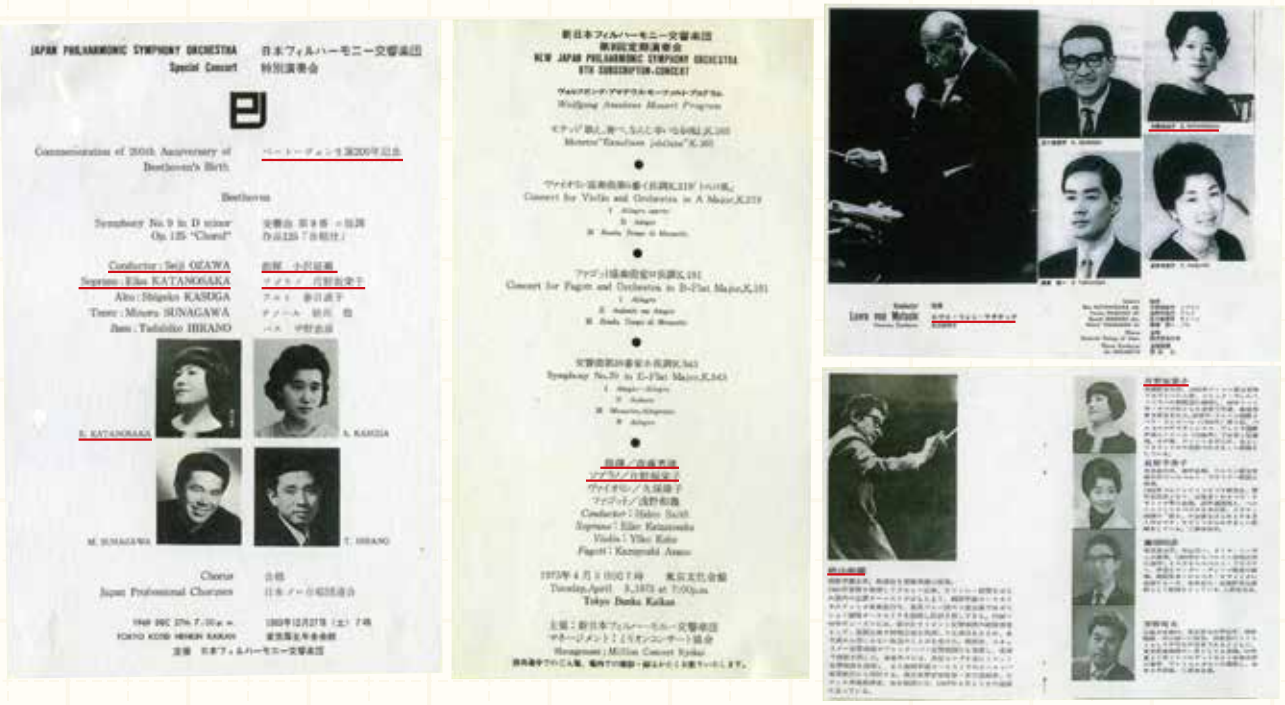

図3　左：日本フィル，ベートーヴェン生誕200年記念特別演奏会「第9」，小澤征爾
中：新日フィル定演，モーツァルト，斉藤秀雄
右上：N響定演，ブルックナー，フォン・マタチッチ
右下：東京アカデミー合唱団特別演奏会，ベートーヴェン「荘厳ミサ曲」，秋山和慶（副・尾高忠明）

69，70：**ヘンデル**「メサイア」森正

（3）日本フィルハーモニー交響楽団

67：**ベートーヴェン**「第９」渡辺暁雄

69：**ベートーヴェン**「第９」小澤征爾

なお 69 はベートヴェン生誕 200 年記念特別演奏会で，特別に出演依頼。

（4）新日本フィルハーモニー交響楽団

73：**モーツァルト**「モテット」斉藤秀雄

斉藤は桐朋学園の創設者の一人で，小澤征爾，秋山和慶ら多くの演奏家を育てた。

（5）東京交響楽団

68：**バッハ**「ミサ曲ロ短調」遠山信二

69：**ベートーヴェン**「荘厳ミサ曲」秋山和慶

77：**ベートーヴェン**「荘厳ミサ曲」山口貴

以上，当時を代表する指揮者の演奏会を列挙した。栄子はウィーンからシベリア鉄道等を利用して１週間かけて帰国，ほぼぶっつけ本番状態で歌い，戻る。そんな時代だった。

このように多数のオファーがあったのは，当時，宗教曲の大曲を，最高に歌えるのは，日本では栄子を置いて他にいなかったから，と言っても過言ではない。

栄子は，アカデミーで「リート・オラトリオ科」も首席で卒業し，ウィーンで大活躍していたからである。

図３は懐かしい，小澤，斉藤，マタチッチ，秋山との演奏会のプログラム。ソプラノの嬉しい所は，プログラムで通常，指揮者の次に名前がでる事である。ソプラノの重要性が分る（図３で赤の下線）。

〔2〕鹿児島時代より声楽一筋の人生

栄子は 41 年，鹿児島市草牟田で生まれ育った。南日本音楽コンクールの声楽部門で優勝。武蔵野音大の声楽科にトップ入学。

ウィーンの名教師，音大客員教授のシュメーデルの帰国に際し「ウィーンで待っている」の一声で，音大を３年で中退し，オーストリア政府給費留学生として，ウィーン国立音楽アカデミーに入学。ともかく栄子の歌唱は，大学生時代から別格であった。

アカデミー２，３年の時，シュメーデルらの勧めで挑戦した「ウィーン・オペラ歌手コ

ンクール」第３位，「フランシスコ・ヴィナス国際声楽コンクール」で第１位優勝。

66 年，栄子は「オペラ科」及び「リート・オラトリオ科」を共に首席卒業した。

図４左は，「オペラ科」の卒業証書である。「リート・オラトリオ科」も別にある。

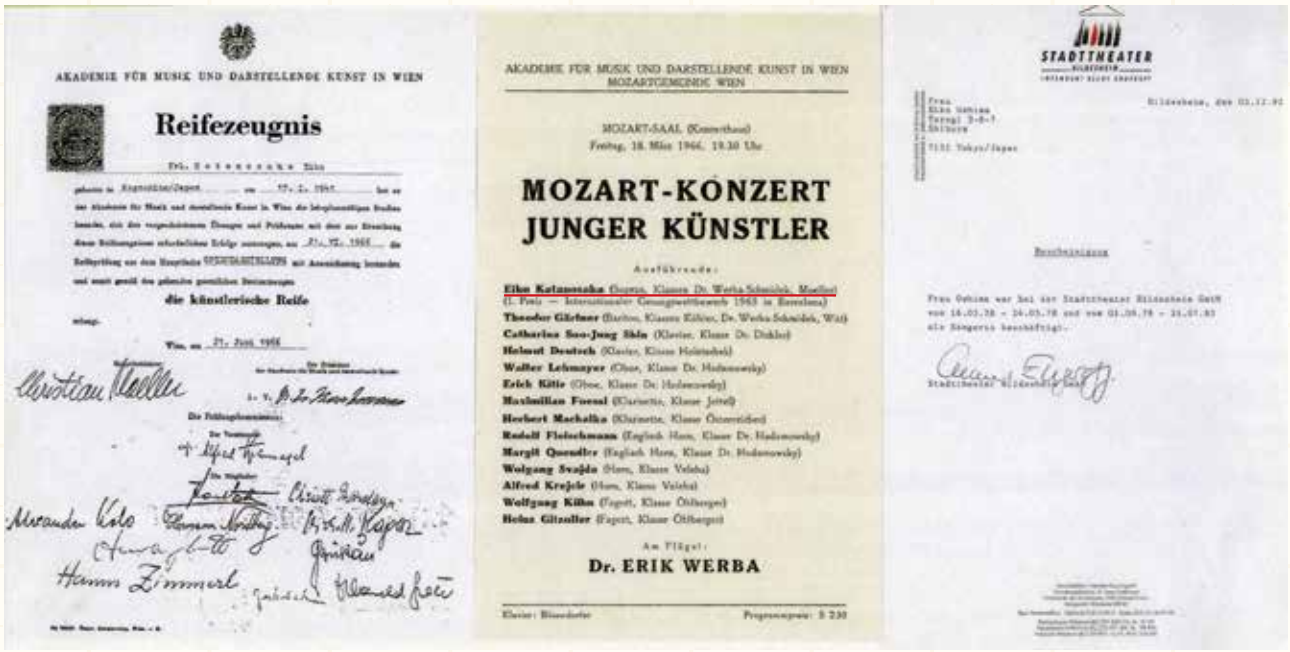

図４　左：ウィーン国立音楽アカデミー（現・ウィーン国立音楽大学），オペラ科首席卒業証書（リート・オラトリオ科も首席）'66
中：テレビ放送された卒業オペラ公演（栄子主演）
右：ヒルデスハイム歌劇場と専属契約

多数の指導教官全員の自筆サインがある点が，日本の卒業証書と異る。

既にウィーンで高名であった栄子主演の卒業公演オペラは，前評判も高く，当時としては珍しく，テレビ放映された（図４中）。

これだけの実績があれば，日本に帰国するという選択肢もあったが，栄子はヨーロッパで声楽家として，更なる経験を積む道を選んだ。日本と異り，ここから厳しいプロの生活が始まる。甘くない，実力の世界である。

〔３〕ウィーンでの活躍

２度のコンクールの成果を機に，ウィーンの高名なコンサート・マネージャーと契約（欧米では，これが重要）し，幸い，ソプラノのソリストとしての依頼が殺到した。

主要な公演を列挙。指揮者名は省略，演奏会場で「ウィーン学友協会大ホール」は，以下（学友）と省略する（図５）。

図５　ウィーン学友協会大ホールでの公演
モンテヴェルディ「聖母マリアの夕べの祈り」
栄子は中央やや左（つやのある黒い服）

66：**オルフ**「カルミナ・ブラーナ」（学友），**ベネウォリ**「大ミサ曲」ウィーン音楽祭（学友），**モンテヴェルディ**「聖母マリアの夕べの祈り」（学友），**オルフ**「カルミナ」，**ヘンデル**「シチリア頌歌」バルセロナ音楽祭

67：**ハイドン**「天地創造」（学友），**バッハ**「マグニフィカート」，**フォーレ**「レクイエム」，**ブラームス**「ドイツ・レクイエム」

スペイン・ビルバオ国際音楽祭，**コダーイ**「テ・デウム」（学友），**モンテヴェルディ**「聖母」（学友）指揮マタチッチ

68：**ハイドン**「四季」（学友）

69：**ヘンデル**「ソロモン」（学友），**オルフ**「カルミナ」（学友）

図６　レナード・バーンスタインとの共演

69年，**バーンスタイン**指揮の「ミサ曲」で栄子は，彼との共演を果たす。バーンスタインは，58-69にニューヨーク・フィルの黄金時代を築き，69に辞任しウィーンを訪れた。栄子はウィーンで実績を重ねた（図６）。

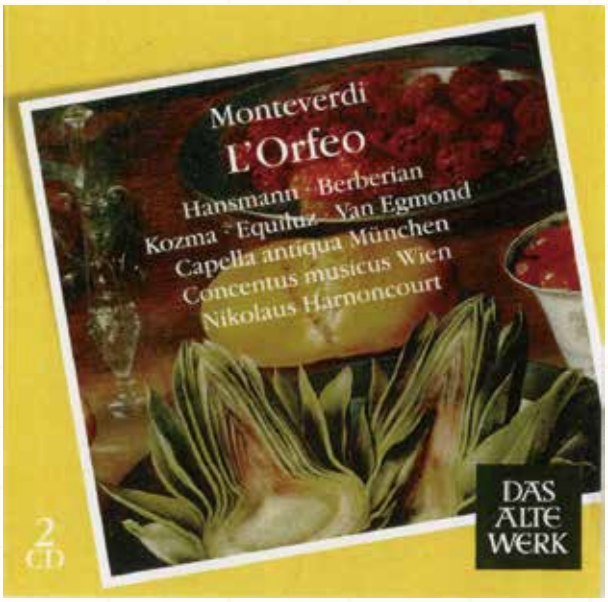

図７　レコーディング，モンテヴェルディのオペラ「オルフェオ」指揮・アーノンクール

（付録）　レコーディング

70年までに栄子は，**ハイドン**，**モーツァルト**「小オルガンミサ曲」，**ハイドン**「ミサ・ブレヴィス」，更には，古楽器演奏の第一人者・**アーノンクール**指揮の**モンテヴェルディ**のオペラ「オルフェオ」のソリストとして，レコーディングに参加（図７）。

図８　プレミアでのプリマ・栄子に関する新聞報道
左：「蝶々夫人」　中：「ルサスカ」　右：「ラ・ボエーム」
左：オランダ，'80　指揮・飯森泰次郎（令和5年8月15日死去，82歳，御冥福をお祈りします）

〔4〕第一線のオペラ歌手として，専属契約，黄金のバラ賞，野外劇場での音楽祭

71年，グラモフォン・レコード勤務の大島氏（ヴォイス・トレーナー）と結婚。これを機に本格的にオペラに集中した（図4右）。

（1）74-78：南バイエルン・パッサウ州立歌劇場と第1ソプラノの専属契約

（2）78-83：ニーダーザクセン州，ヒルデスハイム市立歌劇場と第1ソプラノの専属契約

第1ソプラノ，即ちプリマ・ドンナは劇場の顔である。第2，3ソプラノもいる。

2つの劇場の**プリマ・ドンナ**として，以下のオペラに主演した代表的演目を紹介する。

モーツァルト「ドン・ジョバンニ」「魔笛」「コシ・ファン・トゥッテ」「フィガロの結婚」，**プッチーニ**「蝶々夫人」「ラ・ボエーム」「友人フリッツ」，**ヴェルディ**「椿姫」「運命の力」，**ジョルダーノ**「アンドレア・シェニエ」，**チャイコフスキー**「スペードの女王」「オイゲン・オネーギン」，**ドヴォルザーク**「ルサルカ」，**ウェーバー**「魔弾の射手」，**オッフェンバック**「ホフマン物語」他……（図8）。

専属ばかりでなく，長期契約も含めた客演依頼も多数ある。代表的なものを列挙する。

デュッセルドルフ歌劇場（3年），ミュンヘン国立歌劇場ゲルトナー（6年），ブラウンシュバイク歌劇場，シュトゥットガルト歌劇場，ダルムシュテット歌劇場，カッセル歌劇場，ハーゲン歌劇場，キール歌劇場，オランダ・ヘンガローエンスク歌劇場，他。

さて，多数の舞台の内，印象に残るものを2つだけ紹介しよう。

(a) ミュンヘン国立歌劇場ゲルトナーの「蝶々夫人」，「黄金のバラ賞」受賞

ミュンヘンでの77年の客演公演「蝶々夫人」は「ブラヴォー」の嵐で大絶賛を浴びた。ミュンヘン国立歌劇場であまたある公演中，最も素晴らしい歌手に贈られる「**黄金のバラ賞**」を栄子は授与された（図9）。オペラ歌手として最高の勲章の1つを受けた他，これにより，ミュンヘン国立歌劇場での6年の長期客演契約も得る事となった。

栄子の次に，名誉ある本賞を授与されたのは，ミュンヘンで「ファルスタッフ」を主演

12 FEUILLETON

Ein großes Bühnentalent debutiert als Butterfly

Zweitpremiere am Gärtnerplatz mit der Japanerin Eiko Oshima

Oberbürgermeister Dr. Brichta gratulierte Eiko Oshima zur „Goldenen Rose"

Für ihr Gastspiel als „Madame Butterfly" am Münchner Gärtnerplatztheater bekam die Passauer Sopranistin Eiko Oshima von einer Münchner Boulevardzeitung die „Goldene Rose" verliehen. Oberbürgermeister Dr. Emil Brichta ließ es sich nicht nehmen, der japanischen Sängerin mit Blumen zu ihrem Erfolg zu gratulieren. Eiko Oshima verläßt Passau nach Beendigung der Spielzeit im Frühsommer, sie hat in Hildesheim ein neues Engagement bekommen. (Foto: Popp)

図9　ミュンヘン市長より「黄金のバラ賞」の授与
ミュンヘン国立歌劇場「蝶々夫人」，'77，栄子を絶賛する新聞

したドミンゴであった事は，一言，付け加えておいてもよいであろう。

（b）東欧最大の音楽祭，ルビアーナ夏の音楽祭プーラ（野外劇場）での公演

79，81年の2回，旧ユーゴスラビアの音楽祭に招待された。1万7千人収容の東欧最大のプーラの大観衆の前で，「蝶々夫人」を演じたが，この公演には，ウィーンに留学中の鹿児島の寺園さん，巻木さんも同行し，忘れられない公演となった（図10）。

図10　ルビアーナ夏の音楽祭，プーラの公演
ウィーン留学中の寺園，巻木さんらと

〔5〕欧州で第一線のプロ歌手として活躍し続けるのは，日本と異り厳しい世界

資格の世界ではなく，実力の世界で声楽家として生きていくには，歌劇場との専属契約や客演のオファーが前提となるが，それを受ける覚悟と能力が必要である。

欧米では音楽関係者は利害関係が無ければ，必ず歌手を誉める。然し問題は契約が取れるか否かである。支配人も含め劇場側も経営がかかっているので，歌手には公演を絶対に成功させてもらわねばならない。

特に**第1ソプラノ（プリマ・ドンナ）**は劇場の看板であり，別格の最重要ポジションである。その専属契約には，国内外の敏腕マネージャーの推薦を受けて集まったプロ歌手，約20～30人が劇場でオーディションを受け，たった一人が選ばれる。狭き門である。日本人が合格する事は，極めて困難である。

オペラ・シーズンは通常9～6月である。歌手は8月から練習を開始する。

各劇場により若干異なるが，1シーズンに4～5演目が演じられる。1演目につき，約20公演（それだけ観客が多い），1シーズンでは100公演となる。

第1ソプラノ（プリマ）は，各演目の初日（**プレミア**）には必ず出演する。新聞などでプレミアの演目が評価され，以後の観客動員数に大きく影響するからである（図8）。

プリマは舞台に立ち続けながら，次回の演目も同時に覚えなければならない。その期間は1ヶ月間。プリマは，コンペティトールとマン・ツー・マンで1曲（2～2.5時間位）を覚える。コンペティトールは有能で，ピアノ伴奏をし，相手役もこなしながら，プリマに歌を覚え込ませる。全曲を覚えたら，舞台の演技も覚えなければならない。これが1シーズン続くのである。この経験をした日本人オペラ歌手は稀であろうし，多分，多くの日本人は，ついていけないだろう。栄子の場合，他の劇場からの客演依頼や，練習なしの飛び込み公演も多い。死にものぐるいで立ち向かわないと不可能で，これができないと契約更新できない。歌一筋でないとプロとして生きていけない。一部の人を除き，日本の歌手は，このような現実すら知らないと思う。

日本では，公演数が少い中，立派な歌手が多いので，他に本業をもっていて，生計を立てている人がほぼ全てと思われる。

かくして，栄子は22年間で数十のレパートリーを持つに至り，「蝶々夫人」だけでもヨーロッパで200回以上演じた。

栄子の100頁位のクリアー・ファイルには，ヨーロッパ各地の公演の新聞批評が，ぎっしり詰り，膨大な量となっている（図11）。

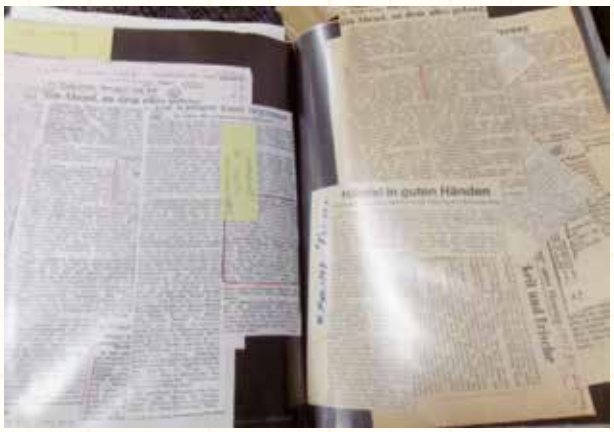

図11　ヨーロッパ公演での膨大な数の新聞の切り抜き
（ファイルの厚さは数cm）

〔6〕帰国して

84 年に帰国した栄子先生は，東京（東京文化会館，都市センターホール，イイノホール，カザルスホールなど）を中心にリサイタルを行い，「チャリティ・コンサート in 白馬」も続けている（図 12）。

図12　上：東京でのリサイタル（伴奏，イエルク・デームス）
下：音楽祭に招かれたウィーンの名ピアニスト，
スコダ，デームスらと栄子

また，大分県立芸術短期大学（名誉教授），フェリス女学院大学で後進を指導した。

現在も鹿児島他，各地の卒業生が年一度，鹿児島で，栄子先生主催の「ムズィク・アイラ」のコンサートを行っている（よく間違われるが，「アイラ」は「歌の女神」を意味し地名ではない）。私達音楽好きは，以前より先生と親しくさせて頂いている（図 13）。

図13　音楽好きの私達と栄子先生（20年位前）

（追加）Made in Kagoshima made “Made in Japan”

栄子先生は昨年，81 歳にして，歌一筋の人生の集大成として “Made in Japan” と題する CD を発表した。日本人としての情感のこもった，素晴らしい歌唱である。製作者や伴奏者のセンスも光る（先生自身の Wunder Record で特別販売可，図 14）。

図14　素晴らしい出来栄えのCD“Made in Japan”
81歳，心に染みる歌唱

また先生の個人コンサートが，県民交流センター（11 月 5 日 2 時開演）で予定されている。楽しみである。時間のある方は，足をはこび，鹿児島から世界に大きく羽ばたいた，先生の歌を楽しんで頂きたい。

（つづく）